

「教科に関する専門的事項（音楽）」における 〔共通事項〕の指導法の検討 ～「音楽の仕組み」に着目して～

岩 佐 明 子¹⁾・松 川 亜 矢²⁾
武 田 恵 美³⁾・岡 田 暁 子⁴⁾

1. はじめに

平成 29 年 7 月に告示された小学校学習指導要領（以下、学習指導要領）（第 9 次改訂）では、教職課程全体をとおして育成を目指す資質・能力が三つの柱（①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」）に整理された。音楽科の学習指導要領においても三つの柱に沿って各項目が整理され、平成 20 年 3 月に告示された第 8 次改訂学習指導要領と、現行の第 9 次改訂学習指導要領の「第 1 目標」を比較すると、第 8 次改訂では「音楽活動の基礎的な能力」にまとめられていた箇所が、現行のものは三つの柱に沿って具体的な文言が示されている。

これらの具体的な文言が示された「第 1 目標」において特筆すべき箇所は、曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解すること、音楽的な見方・考え方を働かせることが明示されたことである。曲想と音楽の構造などとの関わりについて、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編（文部科学省 2018、p.12）では、「曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとは、表現や鑑賞の活動をとおして、対象となる音楽に固有の雰囲気や表情などを感じ取りながら、『音楽から喚起される自己のイメージや感情』と『音楽を形づくっている要素の表れ方や、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり合い』などとの関係を捉え、理解することである。」と解説されている。また、音楽的な見方・考え方を働かせることについて、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編（文部科学省 2018、p.10）において、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などに関連付けること」と定義付けられている。

これらことから、小学校の音楽科で授業を展開する上で、〔共通事項〕の「音楽を形づくっている要素」（「ア 音楽を特徴付けている要素」、「イ 音楽の仕組み」）の理解が欠かせないことが確認できる。

教員養成課程における〔共通事項〕に関する研究を確認すると、高橋（2020、p.42）は、教員養成課程の学生が〔共通事項〕の中で難しい

¹⁾ 京都文教短期大学 ²⁾ 至学館大学 ³⁾ 北陸学院大学 ⁴⁾ 名古屋学芸大学

と感じている要素を、「ア 音楽を特徴付けている要素」の「和声の響き」や「調」、「音階」と報告している。また、高橋（2020、pp.42-43）は「これまでに学生が音楽の構造面について学ぶ機会がほぼなかったことを意味している」ことや「読譜と楽器を操る技能を重視し、音楽の構造面の教授に注意を割いてこなかった従来の音楽教育の問題点が反映されているとみることもできよう」と、今日の音楽教育において音楽の構造が伝えられていないことを提言している。

〔共通事項〕の指導の在り方は、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編（文部科学省2018、p.25）で『「A 表現」、『B 鑑賞』の指導と併せて、指導するものである』と定義付けられており、〔共通事項〕のみを知識として伝えるのではなく音楽的な活動をととした授業展開が求められている。教員は、音楽科を指導する上で〔共通事項〕を十分に理解しておくことが必須であるが、〔共通事項〕自体の課題もあると考えられる。山中（2011、p.54）は、「このように『取り上げる対象』と『指導すること』を事項として括っているため、そもそも文章構造として、〔共通事項〕が『表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要となる』ものであっても、学習する内容とは言い表しにくい性格を持っているのである」と提言している。また、八木（2017、p.58）は、「〔共通事項〕は（中略－引用者）教育内容や学習材としての教材と子どもたちの表現・鑑賞活動をつなぐ中間項としてのメディアなのである。」と、〔共通事項〕をメディアとして定義付けている。その特質から起こる問題点として、八木（2017、p.58）は「要素の理解が表面的なものになってしまう」懸念があることや、「メディアとしての音楽の要素の作用によって、子どもたちの音楽表現や鑑賞の質が深まるという積極性があると同時に、逆

にそれに縛られてしまうことがあるのである。」と、要素に特化したり常に立ち返ったりする指導になる問題をはらんでいると提言している。

筆者らは、小学校教員の養成課程において「教科及び教科の指導法に関する科目」に配置されている「教科に関する専門的事項（音楽）」もしくは「各教科の指導法（音楽）」に該当する科目を担当している¹⁾。科目の配置順は、「教科に関する専門的事項（音楽）」で、歌唱や鍵盤楽器の演奏方法、音楽の基礎知識等を指導した後、に「各教科の指導法（音楽）」で模擬授業や学習指導案の作成をととして音楽科の授業の展開方法を指導している。

筆者らの所感として、学生は、「音楽科の指導法」において〔共通事項〕の「音楽を形づくっている要素」を知識として習得はしているが、小学校音楽科の授業で展開する音楽的な活動と関連づけることが難しい様子である。特に、音楽の構造に関連する「イ 音楽の仕組み」（以下、「音楽の仕組み」）は、楽曲を分析する力が求められるため、知識として理解はしていても、実際の楽曲を読み解く段階において困惑する様子が見られる。

「音楽の仕組み」の各要素は、現行の学習指導要領で初めて示された用語ではなく、第8次改訂小学校学習指導要領にも記載されており、2022年度に在学している学生は小学校で学んだ経験があると考えられる。しかし、小学校の音楽科独特の用語のためか、大学入学までに音楽の個人レッスンや部活動などを経験している学生でも、演奏及び鑑賞の経験や読譜力が「音楽の仕組み」の理解の助けにはならない様子が見られる。「音楽の仕組み」の理解には、音楽の構造に関する観点をととして聴いたり演奏したりし音楽を感受するとともに、「音楽の仕組み」の各要素との関わりを知ることが必要である。しかし、現状は「各教科の指導法（音楽）」

の限られた授業時間数の中で、学生がこれらを体験することは難しく、十分に理解するまでに至っていない。

筆者らはこれらの現状を踏まえ、「各教科の指導法」だけでなく、音楽的活動を中心に指導している「教科に関する専門的事項（音楽）」でも「共通事項」の「音楽の仕組み」を扱うことで、学生が実感をもって理解できるのではないかと考えた。そのため、担当する「教科に関する専門的事項（音楽）」の授業で、歌唱、読譜、鑑賞などの音楽的活動をとおして、「音楽の仕組み」や音楽の構造について理解を深める指導を取り入れた。

「教科に関する専門的事項」と「各教科の指導法」の科目間連携は、教育職員免許法及び同法施行規則の改正（平成31年4月1日施行）の趣旨（文部科学省2018、p.11）として「従来の教科に関する科目と教科の指導法の連携の強化」が挙げられていることから明らかである。「各教科の指導法」については、モデルコアカリキュラムが示されており、指導内容が明確である。しかし、「教科に関する専門的事項（音楽）」については、モデルシラバスを検討した研究（長山 他2018）はあるが一般化はされていない。このため、「教科に関する専門的事項（音楽）」の指導内容を検討することは意義有ることだと考える。

本稿では、2022年度前期に3大学の教員養成課程の「教科に関する専門的事項（音楽）」で試みた、歌唱、読譜、鑑賞などの音楽的活動をとおした「音楽の仕組み」の指導内容を報告する。また、これらの指導全てを終えた時点で実施した調査から、学生の「音楽の仕組み」の理解度を測り、指導の課題を明らかにすることを目的とする。なお、本稿の紙面の関係上、調査結果及び考察については「音楽の仕組み」から「反復」と「変化」の要素を取り上げる。

2. 研究方法

2022年度前期にA、B、Cの各大学で開講された「教科に関する専門的事項（音楽）」に該当する科目の一部分で、歌唱、読譜、鑑賞などの音楽的活動をとおして「音楽の仕組み」を指導した。各大学の指導が終了した時点で「音楽の仕組み」の理解度を測る調査を実施した。以下に、指導に用いた教材、各大学の「音楽の仕組み」の指導概要、質問紙調査の概要を示す。

2-1. 指導に用いた教材

(1) 教材の抽出

「教科に関する専門的事項（音楽）」で「音楽の仕組み」を指導するために用いる教材は、文部科学省の小学校用教科書目録（令和4年度使用）に登載された2社の音楽科教科用図書（以下、教科書）から抽出した。教科書から抽出した理由は、学生が、教材と「音楽の仕組み」が小学校の音楽科においてどのように関連づけられているかを具体的に理解することを目的としたからである。

抽出にあたり、「音楽の仕組み」の要素（反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係など）が教科書及び指導書に明確に示されていることと、楽曲から明確に読み取れることを条件とした。その結果、延べ数で「反復」は52教材、「呼びかけとこたえ」は57教材、「変化」は37教材、「音楽の縦と横との関係」は26教材あった。また、「反復」と「変化」の教材の内、両方の要素が併せて示されていたものが31教材あり、音楽の仕組みの性質上2つの要素に密接な関係があることが分かった。

これらの教材から授業で取り扱うものをさらに絞りこむために、3大学の授業内容や学生の現状を踏まえ5つの条件を設定した。条件は、①「教科に関する専門的事項（音楽）」に該当

する科目で、音楽づくりや創作活動を取り扱っていない大学があったため、「音楽づくり」の教材を除く。②歌詞が「音楽の仕組み」や音楽の構造を理解する一助になることが考えられるため、歌詞が付いている楽曲を扱う。③音楽の構造を捉えるためには、楽譜をとおした指導が必須であるため、楽譜が提示されている楽曲を扱う。④共通教材を優先する。⑤授業時間の一部分で指導できる短い楽曲を扱う、である。設定した条件を基に、授業で取り扱う 11 の教材を抽出した（表 1）。「教材の楽譜」には、「音楽の仕組み」の理解を促すことを目的に図形や解説を付記し学生に配布した。表 1 の各教材の（共）は共通教材、（副）は筆者らで設定した副教材を示す。

(2) 「音楽の仕組み」の解説資料

筆者らの所感として、学生が「音楽の仕組み」を理解しにくい理由として、①「音楽を形づくっている要素」の複数の要素が楽曲の特徴に影響している場合があること、②楽曲を特徴付けている「音楽の仕組み」の要素によって、様々な観点から楽曲分析ができること、③音楽を、要素の観点から言葉で表現する経験があまり無いことが原因と考えられる。そのため、指導では音楽の特性として①と②を伝えた上で、音楽を

要素の観点で解説した文言を用いた資料（以下、解説資料）を配布した。解説資料には、小学校教員養成課程改訂版最新初等科音楽教育法（初等科音楽教育研究会編 2020、pp.246-247）に掲載されている解説を示した。さらに、学生が「音楽の仕組み」が小学校の音楽科でどのように用いられているかを具体的に理解することを目的に、筆者らが小学校音楽科の教科書から各要素を解説した文言を抽出し記載した（表 2）。解説資料は前述の教材の楽譜とともに配布し、教科書で解説されている「音楽の仕組み」の文言を確認し、理解を深める一助とした。

2-2. 各大学の「音楽の仕組み」の指導概要

各大学で共通して指導する内容は、①学生の歌唱や楽器の演奏技術、読譜力を高める活動をとおして、「音楽の仕組み」を指導する、②筆者らで作成した「音楽の仕組み」の解説資料を用いる、③「音楽の仕組み」の要素（反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係）を全て指導する、④「反復」と「変化」の要素がある教材は、2 つの仕組みを併せて指導する、である。教材を扱う回数や時間については、各大学でカリキュラムが異なるため統一しなかった。以下に、各大学の指導概要を挙げる。

表 1 授業で取り扱った教材

「音楽の仕組み」	教材名	教科書名	学年	「音楽の仕組み」	教材名	教科書名	学年
反復	(共) 春がきた	音楽のおくりもの	2	呼びかけとこたえ	(共) かくれんぼ	音楽のおくりもの	2
		小学生の音楽				小学生の音楽	
反復と変化	(副) 汽車は走る	音楽のおくりもの	2		(共) とんび	音楽のおくりもの	4
		(副) 森の子もり歌	音楽のおくりもの			3	
変化	(共) ふるさと	音楽のおくりもの	6		(副) やまびごっこ	音楽のおくりもの	2
		小学生の音楽				小学生の音楽	1
音楽の縦と横との関係	(共) もみじ	音楽のおくりもの	4	(副) プバポ	音楽のおくりもの	4	
		小学生の音楽			小学生の音楽		
		(副) ロックマイソウル			音楽のおくりもの	6	

表2 教科書に掲載されている「音楽の仕組み」の各要素を解説した文言

音楽の仕組み	文言
反復	①くり返し。
	②同じ言葉（歌詞）をくり返す。
	③小さいまとまりのくり返し。
	④1つの旋律やリズムなどがつづけて何回かくり返したり、しばらくしてまた出てきたりする音楽の仕組み。
呼びかけとこたえ	①まねっこしたり、呼びかけたりこたえたりする。
	②旋律やリズムなどが、呼びかけと、それにこたえているような部分でできている。
	③同じ言葉（旋律やリズム）でまねっこする。（模倣）
	④違う言葉（旋律やリズム）でお話するように呼びかけあう。（対照、合いの手）
	⑤一人（1パート）の呼びかけにみんな（その他のパート）がこたえる（まねる）。（模倣、対照、合いの手）
変化	①旋律の形が変化している。
	②リズムの形が変化している。
	③音の高さが（高く、低く）変化している。
	④速度が（速く、遅く、だんだん速く等）変化している。
	⑤強さが（強く、弱く、だんだん強く等）変化している。
	⑥調が（長調から短調に等）変化している。
	⑦音色が（柔らかく、華やかに等）変化している。
	⑧曲想*が（軽やかに、生き生きと等）変化している。
	⑨楽器の数が（増える、減る等）変化している。
	⑩演奏する楽器が変化している。
	⑪音の重なり方が変化している。
	※曲想：その音楽に固有の雰囲気や表情、味わいのこと。
縦と横の音楽の関係	①旋律（歌声）が追いかけてこ（かけ合い）する。
	②旋律（歌声）が重なる。
	・全員が同じ旋律を歌う部分
	・（複数の）旋律が異なるリズムで重なる部分
	・（複数の）旋律が同じリズムで重なる部分
	楽曲全体での、上記①②の旋律の重なり方の違い
	③音と音が重なりながら進んだり、別々の動きをしながら進んだりするかかわり方（音の重なり方と音楽の進み方）を全体的にみること。

(1) A大学の指導概要

第2学年の幼稚園教諭免許取得及び小学校教諭免許取得を目指す当該科目の第1、2、4、5、6、7、9、10、12回の授業内において、各回20分間「音楽の仕組み」についての指導を継続的に行った。指導した内容、時間等を表3に示す。歌唱や器楽などの活動をととして「音楽の仕組み」

を指導した場合には「活動」欄にその活動を記載し、説明や解説のみを行った場合には「活動」欄は網掛けとしている。なお、「反復」、「呼びかけとこたえ」、「変化」、「音楽の縦と横との関係」の4つを指導した場合には、表中に「すべて」と記載した。

指導は、解説資料の内容に準じて行った。初

表 3 A 大学の指導概要

授業回	指導した「音楽の仕組み」	使用した教材	活動	取り組んだ時間
1	すべて①	解説資料		10 分
	呼びかけとこたえ①	解説資料		5 分
		「かくれんぼ」	歌唱	5 分
2	呼びかけとこたえ②	「やまびこごっこ」	歌唱	8 分
		「とんび」	歌唱・鑑賞	12 分
4	反復①	解説資料		8 分
		「春がきた」	歌唱	12 分
5	反復②	「汽車は走る」	歌唱・器楽	20 分
6	変化	解説資料		8 分
		「ふるさと」	歌唱・鑑賞	12 分
7	反復と変化	「森の子もり歌」	歌唱	20 分
9	音楽の縦と横との関係①	解説資料		10 分
		「もみじ」	歌唱・鑑賞	10 分
10	音楽の縦と横との関係②	「プパポ」	歌唱	10 分
		「ロックマイソウル」	歌唱・鑑賞	10 分
12	すべて②	解説資料		20 分

回の第 1 回及び最終回の第 12 回では、「すべて」(①・②)の「音楽の仕組み」を取り扱った。第 1 回は、「音楽の仕組み」の各要素について説明を行い、第 12 回は確認を行った。また第 4、6、9 回で前時とは異なる「音楽の仕組み」を取り扱う際には、まず、解説資料を用いて説明を行い、その後、教材を用いて活動を行った。

それぞれの「音楽の仕組み」について、「呼びかけとこたえ」(①・②)、「反復」(①・②)、「変化」、「反復と変化」、「音楽の縦と横との関係」(①・②)の順で取り上げた。

「呼びかけとこたえ」、「変化」、「音楽の縦と横との関係」では、それぞれ「かくれんぼ」、「やまびこごっこ」、「とんび」、「ふるさと」、「森の子もり歌」、「もみじ」、「プパポ」、「ロックマイソウル」を用いて、歌唱活動及び鑑賞を行った。ここでは、それぞれの「音楽の仕組み」を、どのように表現活動に生かすことができるかについて考え、各々が実際に表現する活動を行った。また、音源を聴き、それぞれの「音楽の仕組み」

が、音楽のよさや美しさとどのように関連しているのかを考え、発表し共有する時間を設けた。「反復」では「春が来た」と「汽車は走る」を取り上げ、歌唱活動をとおしてリズムや旋律の反復に気付き、どのような表現の工夫が可能であるかを考え発表した。また、「汽車は走る」では、各声部を異なる楽器で演奏する器楽活動を取り入れ、反復しているそれぞれの声部を聴きながら活動できるようにした。

(2) B 大学の指導概要

第 2 学年前期に開講している科目において「音楽の仕組み」の指導を行った。本科目は、幼稚園教諭免許、保育士、および小学校教諭免許に対応しているため、幼小接続の学習の一環として「音楽の仕組み」を取り扱った。表 3 の記載方法に倣い、指導した内容、時間等を表 4 に示す。

第 7 回に、解説資料及び「教材の楽譜」を配布し、教員が歌ったり演奏したりしながら「音

表 4 B 大学の指導概要

授業回	指導した「音楽の仕組み」	使用した教材	活動	取り組んだ時間
7	すべて①	解説資料（全員） 共通教材（全員） 副教材（小免希望者のみ）		30 分
15	すべて②	解説資料		5 分

楽の仕組み」について説明した。第 1 回～第 6 回の授業内において、時間の関係上「音楽の仕組み」には触れなかったが、「春が来た」、「かくれんぼ」を取り上げて弾き歌いを中心とした活動を行った。第 7 回では、これらの楽曲を反芻しながら「音楽の仕組み」について解説した。

また、第 15 回では、質問紙調査直前に、解説資料を用いて、再度「音楽の仕組み」について簡単に説明した。その際、「楽曲全体を見て、音楽の仕組みを捉えること」「『反復』と『変化』は仕組みの性質上セットになっていることが多いこと」を強調した。

(3) C 大学の指導概要

第 1 学年の小学校教諭免許取得を目指す学生を対象にした科目において、前述の教材を用いて「音楽の仕組み」の指導を行った。当該科目の第 3 回から第 12 回の授業で、基礎的な音楽理論の指導と並行して継続的に取り組んだ。表 3 の記載方法に倣い、各授業回で指導した「音楽の仕組み」、使用した教材、活動内容と時間を表 5 に示す。指導に際して、解説資料を用いてそれぞれの「音楽の仕組み」について活動前に説明したり、活動後に解説したりしながら、「反復」(①～⑤)、「音楽の縦と横との関係」(①～③)、「変化」(①・②)、「呼びかけとこたえ」(①・②)の順で取り上げた。

表 5 C 大学の指導概要

授業回	指導した「音楽の仕組み」	使用した教材	活動	取り組んだ時間
3	反復①	「春が来た」	歌唱	5 分
4	すべて①	解説資料		10 分
	反復②	「春が来た」 「汽車は走る」	歌唱	15 分
5	すべて②	解説資料		5 分
	反復③	「汽車は走る」	歌唱・器楽	30 分
6	反復④	「汽車は走る」	器楽	45 分
7	反復⑤	「汽車は走る」		5 分
	音楽の縦と横との関係①	解説資料		5 分
	音楽の縦と横との関係②	「もみじ」	歌唱	35 分
8	音楽の縦と横との関係③	「もみじ」	歌唱	35 分
9	変化①	「ふるさと」	歌唱	30 分
10	変化②	「ふるさと」	歌唱	10 分
	呼びかけとこたえ①	「かくれんぼ」	歌唱	5 分
11	呼びかけとこたえ②	「かくれんぼ」、解説資料	歌唱	10 分
12	すべて③	解説資料		5 分

「反復」では「春が来た」と「汽車は走る」を取り上げ、歌唱活動をととしてリズムや旋律の反復に気付けるようにした。また、「汽車は走る」では各声部を、楽器を使って演奏しグループ発表をする器楽活動を取り入れ(反復③・④)、反復している声部により注目できるようにした。

「音楽の縦と横との関係」、「変化」、「呼びかけとこたえ」ではそれぞれ「もみじ」、「ふるさと」、「かくれんぼ」を用いて歌唱活動を行った。ここでは、「音楽の仕組み」を表現につなげる視点を得られるよう、それぞれの「音楽の仕組み」によって歌唱表現をどのように工夫するかをグループで考え、発表し共有する時間を設けた。

2-3. 質問紙調査の概要

(1) 調査対象者

本調査は、前節で取り上げた科目を履修した学生のうち、研究調査に同意を得られた 91 名を対象に行った。なお、質問紙の回収率は 100%だった。

(2) 調査方法

調査は、2022 年度前期授業実施期間内に質問紙を配布し実施した。A 大学は、7 月 4 日、7 月 7 日に調査を実施し、各調査にかかった時間は 25 分間だった。B 大学は、8 月 1 日、8 月 2 日、8 月 3 日に調査を実施し、各調査にかかっ

た時間は 15 分間だった。C 大学は、7 月 25 日に調査を実施し、調査にかかった時間は 25 分間だった。質問紙にある 5 曲の音源を 1 曲につき 2 回流し、それぞれの曲について回答者が設問に回答する時間を設けた。調査において、各大学とも同一の音源を使用した。なお、A 大学と B 大学については、指導を行った科目が複数クラス開講されていたため、調査日程が複数に亘った。

(3) 調査内容

2 社の教科書から、「音楽の仕組み」である「反復」、「呼びかけとこたえ」、「変化」、「音楽の縦と横との関係」の各項目が明確に示されている 5 曲²⁾を抽出し、質問紙で「音楽の仕組み」について問う楽曲として設定した。抽出した楽曲と、それぞれの楽曲を形づくっている「音楽の仕組み」を表 6 に示す。

質問紙には、楽曲に関する 3 つの設問を設け旋律楽譜を提示した。

設問は、「① この曲を形づくっている音楽の仕組みは、何でしょう。」、「② あなたが①で答えた音楽の仕組みは、どこにどのように表れているか具体的に書きましょう。」、「③ 楽譜に、②の内容が分かるように丸で囲ったり、線で繋いだりして示してください。」である。さらに、回答者についての情報を得るために、大学入学までの音楽経験と、自身の「音楽のしくみ」の理解度について回答する設問を設けた。

表 6 曲名と「音楽の仕組み」

	楽曲名	「音楽の仕組み」
1	春の小川	反復、変化
2	マルセリーノの歌	反復、変化
3	こげよマイケル	呼びかけとこたえ
4	明日を信じて	音楽の縦と横との関係
5	歌劇「魔笛」から パパゲーノとパパゲーナの二重唱	呼びかけとこたえ、音楽の縦と横との関係

回答者は、授業で配布した音楽の仕組みの「解説資料」を見ながら回答した。提示した楽譜は、教科書に掲載されている楽譜から旋律部分、回答に必要な記号や用語、歌詞を正確に引用して筆者らが楽譜作成ソフトウェア³⁾で作成した(図1、図2)。

なお、前述したとおり本稿では、「反復」と「変化」の要素がある「春の小川」と「マルセリーノの歌」についての設問①、②、③の回答結果について取り上げる。

(4) 倫理的配慮

調査において、全対象者には、参加は自由意志によるものであり、参加、不参加の選択により成績評価・指導において不利益を受けることが無いこと、ならびに、本研究の趣旨と内容について書面及び口頭で説明し、書面にて同意を得た上で調査を行った。また、プライバシーの保護に努め、情報管理には十分留意することを

伝えた。なお、本研究は、京都文教短期大学研究倫理委員会の承認を得ている（申請番号：2022 - 1）。

3. 調査結果

前述の指導(2-2)をとおして「音楽の仕組み」がどれほど理解されたかを測定するために、各大学の調査結果を2つの視点から分析した。第一に、質問紙の設問①をもとに、回答すべき「反復」及び「変化」の用語が回答できているかを確認し、各大学での回答割合を集計した。第二に、質問紙の設問②と③の回答から判断される「音楽の仕組み」の内容の理解度を検討した。以下では、まず設問に対して筆者らが考える最適な回答例を示す。さらに、この検討のために作成した評価ツールを提示し、そののち2つの視点から分析結果を示す。

春の小川

文部省唱歌／高野辰之 作詞／岡野貞一 作曲

図1 質問紙に使用した「春の小川」の旋律楽譜（『小学生の音楽3』2020、p.10をもとに筆者作成）

マルセリーノの歌

相田裕美 作詞／ソロサバル 作曲／乾康平編曲

お は よ う マ ル セ ー リ ー ノ お め め を さ ま せ

お ひ さ ま の ー は ら で わ ー ら ー つ て み て る

マ ル セ リ ー ノ マ ル セ ー リ ー ノ か わ い い て ん し

図 2 質問紙に使用した「マルセリーノの歌」の旋律楽譜
（『音楽のおくりもの 6』2020、p.12 をもとに筆者作成）

3-1. 最適な回答例

「春の小川」と「マルセリーノの歌」の設問
に対する最適な回答例を表 7 と表 8 に示す。

3-2. 評価ツールの作成

「春の小川」と「マルセリーノの歌」の設問
②と③の回答結果から理解度を測定するための
評価ツールを作成した。作成にあたっては、理

表 7 「春の小川」の最適な回答例

設問	最適な回答
①	「反復」、「変化」
②	1 段目の旋律が、2 段目、4 段目で反復している。3 段目の旋律が変化している。
③	

表8 「マルセリーノの歌」の最適な回答例

設問	最適な回答
①	「反復」、「変化」
②	1 段目の旋律が、3 段目で反復している。2 段目の旋律が変化している。
③	

解度を「十分に理解している」、「理解している」、「やや理解している」、「理解が不足している」の4つの尺度とし、評価基準を設定した。これに基づいてすべての回答を4つに分類したところ、「やや理解している」、「理解が不足している」の2つに含まれる回答が、さらにそれぞれ2つのカテゴリに分類できたため、回答は計6つのカテゴリに分類された。各カテゴリ名は回答内

容から「最適」、「適切」、「説明不足」、「説明の誤り」、「不十分な回答」、「明らかな誤答を含む」とし、「理解度測定のための評価基準」（以下、評価基準）を作成した（表9）。また、当初は設問②と③で回答された内容を楽曲別に分類したが、「反復」と「変化」についての理解度をそれぞれ測定すべきであるとの考えに至り、表9をもとに楽曲別に「反復」と「変化」の回答

表9 理解度測定のための評価基準

理解度	カテゴリ	評価基準
十分に理解している	最適	回答箇所が最適であり、「音楽の仕組み」の説明も具体的で十分である。
理解している	適切	回答箇所が適切であり、「音楽の仕組み」の説明も具体的で十分である。
やや理解している	説明不足	回答箇所はあてはまるものの、「音楽の仕組み」の説明がないか、具体的でない、または不足している。
	説明の誤り	回答箇所はあてはまるものの、誤った説明が行われている。
理解が不足している	不十分な回答	「音楽の仕組み」についての説明はなされているものの、箇所が回答されていなかったり箇所が不十分であったりする。
	明らかな誤答を含む	回答箇所が誤っていたり、回答された要素が明らかに楽譜上の「音楽の仕組み」を捉えられていなかったりする。

それぞれについて「評価基準の詳細」を作成した(表 10、表 11)。なお、評価基準における「回答箇所が最適」とは各楽曲で回答すべき「音楽の仕組み」がみられる箇所がすべて回答できていることを指し、「回答箇所が適切」とは、その一部が回答できていることを指す。ただし、「春の小川」の「変化」においては「適切」カテゴリに相当する回答が抽出されなかったた

め、評価基準が生成されなかった(よって表 10 では斜線とした)。「春の小川」の「変化」を、音源でなされている歌唱表現から強弱の変化として捉えた回答については、教材の楽譜上では強弱に関する標記はなく、楽曲全体の構造における「音楽の仕組み」を理解して回答したとは考えられないことから、「明らかな誤答を含む」に含めた。

表 10 「春の小川」の「反復」・「変化」の評価基準の詳細

カテゴリ	「反復」の評価基準	「変化」の評価基準
最適	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1、2、4 段目の反復を回答できている(4、8、12、16 小節目が言及されていなくても良い)。 ・ リズムだけでなく旋律(音の高さ、音程という回答も含む)の反復を回答できている(音とリズム両方が反復していると回答しているものを含む)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 段目の変化を回答できている。 ・ 旋律の変化(音の高さの変化という回答を含む)について説明できている。
適切	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2、4 段目の反復を回答できている。 ・ リズムだけでなく旋律(音の高さ、音程という回答も含む)の反復を回答できている(音とリズム両方が反復していると回答しているものを含む)。 	
説明不足	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1、2、4 段目の反復を回答できているが、以下の点において不足している。 ・ 説明がない。 ・ 旋律の反復について説明できていない(同じような感じ、雰囲気などの回答を含む)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 段目の変化を回答できているが、以下の点において不足している。 ・ 説明がない。 ・ 旋律の変化について説明できていない(曲調、雰囲気、音色、曲想などの回答を含む)。
説明の誤り	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1、2、4 段目に反復があることを回答しているが、リズムの反復として回答している。 ・ 旋律について、誤った文言で説明している(音階など)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 段目に変化があることを回答しているが、リズムの変化として回答している。 ・ 旋律について、誤った文言で回答している(音階など)。
不十分な回答	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各段のリズムが同じであることを反復として回答している。 ・ 合間を置いて繰り返される反復について回答していない(1、2 段目の反復または 1、4 段目の反復だけが回答されている)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 段目に変化があることを回答できていない。
明らかな誤答を含む	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各段の旋律がすべて同じであると回答している。 ・ 4 段目が他の段と同じ旋律であると回答している。 ・ 1 番と 2 番の歌詞が同じであることを反復として回答している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 旋律の中で音が高くなった箇所を変化と捉えている。 ・ 1、2 段目または 3、4 段目をそれぞれひとまとめにして捉えている。 ・ 歌詞が異なることを変化として回答している。 ・ 音源による強弱の変化にのみ言及している。

表 11 「マルセリーノの歌」の「反復」・「変化」の評価基準の詳細

カテゴリ	「反復」の評価基準	「変化」の評価基準
最適	<ul style="list-style-type: none"> ・1、3 段目の反復を回答できている。 ・リズムだけでなく旋律の反復を回答できている（音とリズム両方が反復していると回答しているものを含む）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 段目の変化を回答できている。 ・旋律の変化について説明できている。
適切	<ul style="list-style-type: none"> ・1、3 段目の反復を回答できていないが、1、3、9、11 小節目の反復を回答できている。 ・リズムだけでなく旋律の反復を回答できている（音とリズム両方が反復していると回答しているものを含む）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 段目の変化を回答できている。 ・変化した要素として最も適切な旋律に言及できていないものの、音色、強弱、音の重なり、調、曲想（雰囲気、表情、味わいなどを含む）に言及できている（音源を聴くことによって気付けた要素を含む）。
説明不足	<ul style="list-style-type: none"> ・1、3 段目、または1、3、9、11 小節目の反復を回答できているが、以下の点において不足している。 ・説明がない。 ・旋律の反復について説明できていない（同じような感じ、雰囲気、音、くりかえしなどの回答を含む）。 ・リズムの反復のみ回答している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 段目の変化を回答できているが、以下の点において不足している。 ・説明がない。 ・変化した要素として旋律、音色、強弱、音の重なり、調、曲想（雰囲気、表情、味わいなどを含む）に言及できていない。 ・変化した要素として音の高さ、あるいはリズムのどちらか一方のみ回答している。
説明の誤り	<ul style="list-style-type: none"> ・1、3 段目に反復があることを回答しているが、旋律について、誤った文言で説明している（音階、音程など）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 段目に変化があることを回答できているが、誤った文言で説明している。
不十分な回答	<ul style="list-style-type: none"> ・1 段目と3 段目の反復を回答できていない。 ・ごく一部分の反復のみ回答している（「おはよう」と「おめめを」や、「マルセリーノ」と「マルセリーノ」など）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・変化した要素は回答されているが、箇所が回答されていない。
明らかな誤答を含む	<ul style="list-style-type: none"> ・各段の旋律がすべて同じであると回答している。 ・2 段目が他の段と同じ旋律であると回答している。 ・1 段目と3 段目の反復、あるいは「不十分な回答」に含まれるごく一部分の反復のいずれも回答できていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 段目以外の箇所に変化があると回答している。

3-3. 分類結果

(1) 用語の回答

設問①の有効回答数は91（A 大学33、B 大学27、C 大学31）であった。「春の小川」と「マルセリーノの歌」のそれぞれについて、「反復」と「変化」の2つを回答したものを正答とし、各大学及び全体での正答数とその割合を集計した（表12）。

A 大学とC 大学では「マルセリーノの歌」の方が正答率が低かったが、B 大学では反対の結果となった。また正答でなかった回答のうち、「春の小川」では「呼びかけとこたえ」が全体で6（6.6%）、「音楽の縦と横との関係」が全体で7（7.7%）回答されていた。「マルセリーノの歌」では「呼びかけとこたえ」が全体で11（12.1%）、「音楽の縦と横との関係」が全体で12（13.2%）回答されていた。

表 12 「春の小川」と「マルセリーノの歌」の「音楽の仕組み」正答数と割合

	A 大学 (N=33)		B 大学 (N=27)		C 大学 (N=31)		計 (N=91)	
	正答数	(%)	正答数	(%)	正答数	(%)	正答数	(%)
「春の小川」	28	84.9	21	77.8	23	74.2	72	79.1
「マルセリーノの歌」	19	57.6	22	81.5	20	64.5	61	67.0

(2) 「反復」と「変化」の内容の理解度

設問①で「反復」または「変化」が回答されていたものについて、設問②及び③での回答箇所と説明から「反復」と「変化」の各用語が正しく理解されているかを判断するため、各楽曲の評価基準の詳細(表 10 および表 11)に基づいて回答を分類した。なお、ここでは設問①で「反復」または「変化」が回答されたものを対象としているため、いずれかの回答がなされていれば分析の対象としている。

まず、「春の小川」における「反復」と「変化」の内容の理解度を分析した(表 13)。「春の小川」の設問①で「反復」の回答は 88 (A 大学 33、B 大学 26、C 大学 29)、「変化」の回答は 75 (A 大学 28、B 大学 23、C 大学 24)であった。なお、B 大学の「反復」についての回答のうち 1 つが、「説明不足」と「誤答」のどちらにもあてはまる内容であったため、両方に計上している。

全体として、「十分に理解している」、「理解している」にあてはまる回答は、「反復」で 39.8%、「変化」で 24.0%であった。

「反復」では「最適」または「不十分な回答」が最も多い結果となった。A 大学では「最適」が最多となったが、B 大学と C 大学では「不十分な回答」が最多であり、旋律の反復があらわれる 1、2、4 段目すべてを回答できなかったものが多くみられた。「変化」では全体的に「明らかな誤答を含む」が最も多く、続いて「説明不足」、「最適」が多かった。A 大学では「最適」、B 大学では説明のない「説明不足」、C 大学では「明らかな誤答を含む」が最多であった。ただ C 大学においても、説明のない「説明不足」が目立って多かった。「説明の誤り」に含まれる回答には、3 段目に変化があることに気付いてはいるものの、「旋律」の変化として説明できない回答が多く見受けられた。「明らかな誤答を含む」には、3、4 段目を変化のないひとまとまりとして捉えている回答と、音源の表現から楽譜に書かれていない強弱の変化を回答している回答が多く含まれた。

表 13 「春の小川」における「反復」「変化」についての回答箇所と説明

理解度	カテゴリ	「反復」の該当箇所と説明								「変化」の該当箇所と説明							
		A (n=33)		B (n=26)		C (n=29)		計 (n=88)		A (n=28)		B (n=23)		C (n=24)		計 (n=75)	
		回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)
十分に理解している	最適	15	45.5	6	23.1	7	24.1	28	31.8	10	35.7	4	17.4	4	16.7	18	24.0
理解している	適切	5	15.2	0	0.0	2	6.9	7	8.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
やや理解している	説明不足	0	0.0	6	23.1	3	10.3	9	10.2	5	17.9	8	34.8	6	25.0	19	25.3
	説明の誤り	1	3.0	2	7.7	1	3.4	4	4.5	3	10.7	4	17.4	4	16.7	11	14.7
理解が不足している	不十分な回答	9	27.3	10	38.5	15	51.7	34	38.6	1	3.6	2	8.7	3	12.5	6	8.0
	明らかな誤答を含む	3	9.1	2	7.7	1	3.4	6	6.8	9	32.1	5	21.7	7	29.2	21	28.0

次に、「マルセリーノの歌」における「反復」と「変化」の内容の理解度を分析した（表14）。「マルセリーノの歌」の設問①で「反復」の回答は85（A大学31、B大学25、C大学29）、「変化」の回答は70（A大学25、B大学24、C大学21）であった。全体として、「十分に理解している」、「理解している」にあてはまる回答は、「反復」で56.4%、「変化」で60.0%であった。

「反復」では全体として「最適」が5割を超え、よく理解できている学生が半数以上と判断されるが、個々にみるとB大学とC大学では「最適」は40%程度となっており、「説明不足」または「不十分な回答」がやや多くみられた。また、「変化」ではいずれの大学においても「最適」が少なく、A大学とC大学では「適切」が、B大学では「説明不足」の回答が多くみられた。

2曲を比較すると、「反復」または「変化」の各用語の理解度に楽曲による差がみられる。いずれも「春の小川」より「マルセリーノの歌」の方が、理解度が高いと判断できる結果となった。

4. 考察

4-1. 指導内容の検討

調査結果から、設問①の「音楽の仕組み」の用語の回答では、「春の小川」では全体で79.1%、「マルセリーノの歌」では全体で67.0%が正答であった。本研究での指導をとおして、該当の楽曲にどの「音楽の仕組み」が当てはまるかを判断する力を養うことはある程度達成できたと考えられる。設問②及び③の回答内容を踏まえ、指導内容について考察する。

(1) 楽曲による理解度の違い

調査で使用した「春の小川」と「マルセリーノの歌」は、どちらも「音楽の仕組み」の「反復」及び「変化」の要素が示されている。同じ要素で形づくられている楽曲にも関わらず、設問②及び③の調査結果を比較すると、両要素とも「春の小川」より「マルセリーノの歌」の方が、理解度が高いことが分かった。その理由を、評価基準（表9）と評価基準の詳細（表10、11）から探る。

まず、「反復」の回答結果を評価基準の理解度に当てはめると、「春の小川」は「理解が不足している」が最も多く45.4%、「十分に理解している」が31.8%、「やや理解している」が

表14 「マルセリーノの歌」における「反復」「変化」についての回答箇所と説明

理解度	カテゴリ	「反復」の回答箇所と説明								「変化」の回答箇所と説明							
		A (n=31)		B (n=25)		C (n=29)		計 (n=85)		A (n=25)		B (n=24)		C (n=21)		計 (n=70)	
		回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)
十分に理解している	最適	23	74.2	10	40.0	12	41.4	45	52.9	5	20.0	5	20.8	3	14.3	13	18.6
	理解している	0	0.0	2	8.0	1	3.4	3	3.5	15	60.0	4	16.7	10	47.6	29	41.4
やや理解している	説明不足	4	12.9	11	44.0	7	24.1	22	25.9	2	8.0	11	45.8	2	9.5	15	21.4
	説明の誤り	0	0.0	0	0.0	1	3.4	1	1.2	1	4.0	0	0.0	0	0.0	1	1.4
理解が不足している	不十分な回答	4	12.9	2	8.0	7	24.1	13	15.3	0	0.0	1	4.2	2	9.5	3	4.3
	明らかな誤答を含む	0	0.0	0	0.0	1	3.4	1	1.2	2	8.0	3	12.5	4	19.0	9	12.9

14.7%、「理解している」が8.0%だった。「マルセリーノの歌」は「十分に理解している」が最も多く52.9%、「やや理解している」が27.1%、「理解が不足している」が16.5%、「理解している」が3.5%だった。評価基準の詳細では、評価基準の全ての項目に要素の回答箇所に関する記述を設定している。「春の小川」より「マルセリーノの歌」の方が、「反復」がある箇所を正確に回答できていることから、理解度が高くなった。

その理由として、「反復」の箇所を正確に回答するにあたり、両楽曲の構造が大きく関わっていると考えられる。「春の小川」はA(aa')-B(ba')の二部形式であり、「マルセリーノの歌」はA-B-Aの三部形式である。両楽曲とも、合間を置いて繰り返される「反復」に気付くことが必要になるが、「春の小川」に関してはa及びa'の小楽節を「反復」と捉える力が必要になる。さらに、「春の小川」は4小節毎のフレーズのリズムパターンが同一であるため、旋律ではなくリズムのみに着目すると、全ての小楽節が「反復」と理解され、楽曲全体の形式を捉えられない回答となる。評価基準の詳細のカテゴリ「不十分な回答」に該当する38.6%が、「各段のリズムが同じものを反復としている」か「合間を置いて繰り返される反復を回答していない」という結果になっていることから、小楽節における「反復」に気付く力が必要であることが分かる。「マルセリーノの歌」は、A部分からB部分にかけて転調し再現部で原調に戻ることから、「反復」に気付きやすいことや、小楽節が無いことから「反復」の箇所を特定しやすかったのではないかと考えられる。また、「マルセリーノの歌」の評価基準の詳細では、A部分が「反復」したという回答に加え、1、3、9、11小節が「反復」した回答を「適切」あるいは「説明不足」のカテゴリに入れた。理

由として、4小節をフレーズのまとまりとして見ることはできていないが、2小節毎に同じ旋律が「反復」されていることに気付いているからである。これらのことから、「マルセリーノの歌」の理解度が高くなったと考えられる。

次に、「変化」の回答結果を評価基準の理解度に当てはめると、「春の小川」は「やや理解している」が最も多く40.0%、「十分に理解している」が24.0%、「理解が不足している」が36.0%、「理解している」が0%だった。「マルセリーノの歌」は「十分に理解している」が最も多く52.9%、「理解している」が41.4%、「やや理解している」が22.8%、「理解が不足している」が17.2%だった。「変化」に関しても「反復」同様に、箇所を回答できたかによって理解度に違いが生じている。箇所の正答率では、「春の小川」では64.0%が3段目に「変化」が生じたと回答したのに対し、「マルセリーノの歌」では82.8%が2段目に「変化」が生じたと回答した。両楽曲とも、旋律の「変化」について言及した回答を「十分に理解している」のカテゴリにしている。楽曲の特性として、「春の小川」は旋律に「変化」が生じたという回答のみが「十分に理解している」と「理解している」になるが、「マルセリーノの歌」は旋律に加え音色、強弱、音の重なり、調、曲想（雰囲気、表情、味わい）の「変化」も「十分に理解している」と「理解している」になる。つまり、「マルセリーノの歌」では「春の小川」に比べ、「変化」を感じる要素が多いことが、理解度の高さに繋がっている。

上記から、「反復」や「変化」の理解には、要素の例示と楽曲の形式に関わる知識を併せて伝えること、「変化」を感受する感性や言葉で表現する力を指導すること、楽曲全体を俯瞰して聴くことや楽譜全体を読譜する経験をとおして音楽の構造を意識する指導が必要であると考えられる。

(2) 「ア 音楽を特徴付けている要素」の用語理解

設問①で、「音楽の仕組み」の要素について正確に回答できていても、設問②の自由記述で正確な「ア 音楽を特徴付けている要素」(以下、「音楽を特徴付けている要素」)の用語で回答できない、あるいは回答者の意図は伝わるが、用語の正確な意味を理解していない回答があった。

本研究では、「音楽の仕組み」の理解度を測ることを目的にしているため、文脈から正確に判断できた場合のみ、「音楽を特徴付けている要素」を回答者の意図に沿って解釈した。まず、「春の小川」の「反復」の評価基準の詳細では、「音とリズムの両方」、「音の高さ」、「音程」の文言を、「旋律」の意味で記載したと判断し、「最適」あるいは「適切」カテゴリに入れた。また、「旋律の反復」と回答すべきところ、「リズムの反復」と回答した場合は、明らかに用語の理解が不足しているため、「説明の誤り」カテゴリに入れた。「変化」の評価基準では、「音の高さ」の文言を「旋律」の意味で記載したと判断し、「最適」カテゴリに入れた。「旋律」を「曲調」、「雰囲気」、「音色」、「曲想」と回答した場合は「説明不足」カテゴリに入れた。「旋律」を「リズム」や「音階」と回答した場合は、「説明の誤り」カテゴリに入れた。

「マルセリーノの歌」の「反復」の評価基準の詳細では、「音とリズムの両方」の文言を「旋律」の意味で記載したと判断し、「最適」あるいは「適切」カテゴリに入れた。また、「旋律の反復」と回答すべきところ、「同じような感じ」、「雰囲気」、「音」、「くりかえし」と回答した場合は「説明不足」カテゴリに入れた。さらに、「旋律」を「音階」、「音程」と回答した場合は明らかに用語の理解が不足しているため「説明の誤り」に入れた。「変化」の評価基準では、「旋律」の「変化」を、「音の高さ」あるい

は「リズム」の「変化」のどちらか一方と回答した場合は、「説明不足」カテゴリに入れた。

「春の小川」、「マルセリーノの歌」どちらの回答結果においても、上記のとおり「旋律」を他の文言で表現している場合が多かった。特に「旋律」を「音」や「リズム」と記載している回答が多く、要素を感覚としては理解しているものの、正確な用語の理解には至っていないことが分かる。本研究では、筆者らが質問紙の設問②及び③の回答の内容から、回答者の意図をくみ取り分類したが、学生が将来音楽科の授業を展開するにあたって、さらに用語の理解を深めることが必要である。

また、「音楽を特徴付けている要素」には「調」の要素がある。「マルセリーノの歌」は三部形式であり、A部分のイ短調からB部分のハ長調に転調した箇所や、再度A部分に戻った箇所で調性の「変化」が生じている。設問②の回答では、様々な文言で「変化」が表現されており、「変化」に気付いてはいたがその原因の調性についての記述は無かった。

今回の調査では、「音楽を特徴付けている要素」の中でも「旋律」と「リズム」の理解が曖昧な点、「調」の「変化」を感覚として捉えてはいるが、要素としては意識していないことが明らかになった。

上記から、「音楽を特徴付けている要素」では「旋律」、「リズム」、「調」について理解を深めることが必要であることが分かった。また、「音楽を特徴付けている要素」と「音楽の仕組み」は深く関わっていることも伝える必要がある。

(3) 誤答への指導

「マルセリーノの歌」の設問①で「呼びかけとこたえ」の回答の中には、設問②において歌詞の内容を基に、呼びかけていると解釈し回答した学生がいた。歌詞の内容や音源の歌手が呼

びかけるように歌っていると感じたため、「呼びかけとこたえ」と回答した可能性がある。「呼びかけとこたえ」は、小学校教員養成課程改訂版最新初等科音楽教育法（初等科音楽教育研究会編 2020、p.247）によると「ある音やフレーズに対して、別の音やフレーズが呼応するように感じられるものを指す。」とされ、「呼びかけ」と「こたえ」が併せて示される。「マルセリーノの歌」では「呼びかけ」に対する「こたえ」が無いため、「呼びかけとこたえ」の要素は誤答である。しかし、指導においては「呼びかけとこたえ」の正しい解釈を伝えるとともに、歌詞の内容をくみ取ることや音源の音楽的な表現を感受できたことを伝える必要がある。

4-2. 各大学の指導内容と理解度の比較

各大学の理解度を比較し、指導内容と照らし合わせて考察してみたい。

まず、質問紙調査の設問①において、「反復」と「変化」の両方を回答したものの比較をしてみる（表 12）。3-2. にて述べたとおり、A 大学と C 大学では「春の小川」よりも「マルセリーノの歌」の方が、正答率が低かったが、B 大学では反対の結果となった。「春の小川」では、3 大学とも正答率が 70 ～ 80% 程度であったが、「マルセリーノの歌」では、A 大学と C 大学が 60% 前後であったのに対し、B 大学は 81.5% で、約 20 ポイントの差が認められた。また、「マルセリーノの歌」における正答でなかった回答のうち、「音楽の縦と横との関係」が全体で 13.2% であったと前述したが、この内 B 大学は 0% であった。つまり、「マルセリーノの歌」における「音楽の縦と横との関係」の回答者の有無が、大学間の結果の差異が生まれた要因の一つと考えられる。B 大学では、調査直前に、教員から学生に「マルセリーノの歌」に関して、音源に重唱が含まれること、楽譜を重視して回

答することが伝えられており、そのことが「音楽の縦と横との関係」を回答から除外することに繋がった可能性が推察される。より精度の高い調査結果を得るためには、事前の説明文言を統一することが必要である。

次に、「春の小川」の理解度の分析を見ると、A 大学は「反復」「変化」両方において「最適」がもっとも多い結果となった（表 13）。また、「マルセリーノの歌」においても、A 大学は、「反復」の「最適」の回答率が 74.2% で、B 大学 40.0%、C 大学 41.4% を大きく上回った（表 14）。A 大学と C 大学の指導では、説明だけでなく、歌唱活動や楽器活動をとおして「反復」と「変化」それぞれの理解を深める時間が設けられていたが、中でも A 大学では「反復」と「変化」を同時に扱った回があった（表 3）。「反復」と「変化」を同時に扱うことで、楽曲全体の構成を俯瞰してみることができ、「音楽の仕組み」をより適切に読み取る力が身につく可能性が考えられる。また、C 大学では歌唱と器楽の活動によって指導を行っていたが、A 大学ではこれらに加えて鑑賞の活動が行われたことも特筆すべきであろう。音源の鑑賞をとおして「音楽の仕組み」を考えることによって、楽曲全体を客観的に見渡す視点を得た可能性が示唆される。今後は詳細な指導内容の比較を試みたい。

最後に、回答結果の「説明不足」カテゴリのポイントについて取り上げる。B 大学では、「春の小川」「マルセリーノの歌」両曲の「反復」と「変化」、つまりすべての「説明不足」カテゴリにおいて、A 大学、C 大学よりもポイントが高かった（表 13、表 14）。特に「マルセリーノの歌」の「変化」では、「説明不足」が A 大学 8.0%、C 大学 9.5% であったのに対し、B 大学では 45.8% を占めており、差がもっとも顕著に認められた。要因として、B 大学の指導内容が教員の演奏と説明のみだったことが考えられ

る（表4）。A大学とC大学では、説明の他に、「音楽の仕組み」に自ら気づいたり、それらを生かした表現の工夫についてグループで考えたり発表したりする時間が設けられていた。B大学の学生は、教員の演奏と説明を聞くのみで、自ら考えて言語化する取り組みが行われなかったため、回答箇所について説明する力が不十分だったと推察される。「音楽の仕組み」の理解をより深めるには、学生が自ら表現の工夫を実践したり共有したりする経験の必要性が示唆された。また、質問紙調査の時間が、A大学、C大学は25分間、B大学は15分間で、B大学の回答時間が短かったことも要因の一つとして考えられる。より正確なデータを獲得するために、回答時間を同一にすることが確認された。

5. 今後の課題

本研究では、「音楽の仕組み」の「反復」と「変化」の2つの要素に着目し、調査結果から考察した。調査結果から、歌唱活動や演奏活動、鑑賞活動をとおして、「音楽の仕組み」を自ら考えて言語化する取り組みや用語の理解を深めることの必要性が示唆された。また、「反復」を「変化」と同時に扱うことで楽曲全体の構成を俯瞰して見るができる可能性があることが分かった。本研究で目的としていた、「教科に関する専門的事項（音楽）」における「音楽の仕組み」の指導課題は、「反復」、「変化」については、ある程度明確になったと考える。

しかし、調査結果から推測される調査方法の課題や、今回は取り上げることができなかった項目があった。

まず、調査方法の課題を示す。1点目は、調査時に楽曲の音源を流し質問紙の旋律楽譜を見ながら回答する方法を取ったため、学生が音源から楽譜、どちらの情報を捉えたかが不明だった

点である。「マルセリーノの歌」の回答に、2段目に「変化」をもたらした要素として強弱の回答があったが、楽譜に強弱記号が記載されていたことから、強弱を判断した理由が楽譜か、音源か、もしくはその両方だったのかが判別できなかった。今後は、どちらの媒体から判断したのかを明確にする設問を設定し、理解度をさらに正確に測りたい。2点目は、調査で使用した音源は「春の小川」は斉唱、「マルセリーノの歌」は重唱で演奏形態が異なっていた点である。調査結果では、「マルセリーノの歌」の設問①で、12名が「音楽の縦と横との関係」と回答した。また、設問②において、楽曲の2段目に「変化」をもたらした要素として、音色、音の重なり、曲想（雰囲気、表情、味わい）の回答があった。これらの回答の理由として、「マルセリーノの歌」の歌の音源が重唱だったため、音の重なりや響きから判断できたと推測される。楽譜からではなく、音源を聴くことによって気付くことができたと考えられるため、評価基準のカテゴリでは、「適切」に配置した。指導の一環としては、音源を聴くことにより要素に気付くことができる力を身につけてほしいが、正確な理解度を測るためには、調査で使用する楽曲について音源の演奏形態を統一することが必要だと考える。3点目は、調査時に教員が説明する文言を、詳細に統一しなかった点である。前項のとおり、「マルセリーノの歌」の質問紙調査の設問①の正答率の差違は、教員の説明内容の違いによるのではないかと推測される。より精度の高い調査結果を得るためには、説明文言を統一することが必要だったと考える。4点目は、学生が回答する時間を厳密に統一しなかった点である。調査では楽曲の音源を2回流し、その直後に学生が回答する時間を設けたが、大学によって回答時間が異なっていた。回答時間が回答の内容に影響を及ぼすことが考

えられるため、回答時間を統一することが必要である。

次に、本研究で取り上げることができなかった内容について示す。調査結果及び考察では、「音楽の仕組み」の要素「反復」と「変化」について取り上げたが、その他の要素の「呼びかけとこたえ」、「音楽の縦と横との関係」については取り上げることができなかった。今後、これらの要素についての回答結果を分類し、指導内容を検討したいと考える。また、学生の入学前までの音楽的な活動経験についての回答結果と、「音楽の仕組み」の理解度との相関を取り上げることができなかった。今後は、入学前の音楽的な経験の有無が「音楽の仕組み」の理解にどのように影響しているかを探りたい。

本研究で作成、配布した解説資料の文言や、教材に示された要素は一例である。本来、音楽科の指導において、これらにとらわれるのではなく、自ら音楽の構造や仕組みについて考えることができる力を育成することや、児童への伝え方を検討できる力が必要である。そのためには、今後は本研究の成果を踏まえ、学生が「教科に関する専門的事項（音楽）」で経験した〔共通事項〕をとおした音楽的な活動が、「各教科の指導法」でどのように活かされたかを検討する必要があると考える。

謝辞

本研究にご協力いただいた A 大学、B 大学、C 大学の皆様に心より御礼申し上げます。

注

- 1) 本研究で調査対象とした 3 大学の内 B 大学は、調査時点では、文部科学省が定めた経過措置により、教育職員免許法及び同法施行規則改正（平成 31

年 4 月 1 日施行）以前の区分で授業を実施していた。

- 2) 5 曲が教科書に掲載されている箇所を示す。
「春の小川」（『小学生の音楽 3』、小学校教科書、教育芸術社、p.10）
「マルセリーノの歌」（『音楽のおくりもの 6』、小学校教科書、教育出版、p.12）
「こげよマイケル」（『小学生の音楽 5』、小学校教科書、教育芸術社、p.36）
「明日を信じて」（『音楽のおくりもの 6』、小学校教科書、教育出版、pp.30-31）
「歌劇『魔笛』からパパゲーノとパパゲーナの二重唱」（『小学生の音楽 5』、小学校教科書、教育芸術社、pp.12-13）
- 3) 旋律楽譜は、Make Music Finale²⁶ を用いて作成した。

引用・参考文献

- 教育芸術社（2020）『小学生の音楽 1～6』教育芸術社。
教育出版（2020）『音楽のおくりもの 1～6』教育出版。
高橋範行（2020）『音楽科学習指導要領における〔共通事項〕を考える』愛知県立大学教育福祉学部論集 第 69 号、pp.39-44。
文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編』東洋館出版社。
八木正一（2017）「メディアとしての〔共通事項〕—その論理と課題—」『聖徳大学大学院音楽文化研究科聖徳大学音楽学部音楽文化研究会音楽文化研究』16 巻、pp.57-60。
山中文（2019）「学習指導要領にみる〔共通事項〕の課題—小学校音楽科を中心に—」『相山女学園大学研究論集社会科学篇』第 50 号、pp.51-65。
文部科学省（2018）『教育職員免許法等の改正と新しい教職課程への期待』、https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiledfile/2018/12/21/1411908_02.pdf（2022/4/29 にアクセス）。
長山弘・寺内大輔・権藤敦子（2018）「教員養成課程における『教科に関する専門的事項（音楽）』に関する一考察」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部第 67 号、pp.83-90。
初等科音楽教育研究会編（2020）『小学校教員養成課

程 改訂版 最新 初等科音楽教育法 2017 年告示「小
学校学習指導要領」準拠』音楽之友社.

Abstract

Study on Teaching Methods of “Common Items for Each Activity” in Subject-Related Professional Matters (Music): Focusing on the Mechanics of Music

Akiko IWASA, Aya MATSUKAWA, Megumi TAKEDA, Akiko OKADA

This study examined the teaching content of the “Mechanics of music” in the [common items] of the music course in elementary school, in the “specialized matters related to the subject (music)” class of the teacher training course, presented from the students’ level of understanding. Instruction was provided at three universities on the “Mechanics of music,” focusing on musical activities, and a survey was conducted among the students after the instructions had been completed, to measure their level of understanding. This paper classified and discussed the answers regarding musical pieces with elements of “repetition” and “change” in the “Mechanics of music,” based on the evaluation criteria for measuring the level of understanding that had been designed by the authors. The results suggest that it is necessary to have knowledge related to musical form, sensibility, and linguistic expression to perceive music, understand the terminologies of “elements that characterize music,” and to experience the students practicing and sharing creative ideas on their own in the understanding of “repetition” and “change.”

Keywords: Mechanics of music, specialized matters related to the subject (music), music course in elementary school, common items